

## 報告別講評

### A. 研究部門・報告Ⅰ

竹内 理

#### 英語学習者エンゲージメントに関する 文脈的モデルの妥当性検証

【研究者：榎村 祐志】

本研究は、日本人英語学習者の学習エンゲージメントのモデルを動機づけの自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT) の枠組みの下、先行研究に十分にあたり、堅実かつ精緻な統計手法を用い、総計753名(中学生403名、大学生350名)もの参加者を得て検証した力作である。特筆すべき点としては、アウトカム(スキル別の英語習熟度)までを含んでモデル化したことと、学習文脈(中学生・大学生)を考慮に入れて分析(多母集団モデルによるSEM)を行ったことにある。また、心理ネットワークモデルを利用して、変数間(なかでも自律動機づけの3変数である内発的、統合的、同一視的)のコンステレーション、つまりポジティブに関連しあったシステムを明らかにしたことも高い評価に値すると考えられる。

一方で、エンゲージメントの構成がagenticを含む5側面ではなく4側面であることや、中学生の参加者が少ないため中高を一括りにしていること、英語習熟度が成績型ではなく自己評価型であること、さらにはエンゲージメントの階層性にまで拡げて研究がデザインされていないことなどは、著者も一部認識しているように、今後の改善点となるかもしれない。しかし、いずれも基礎研究としての本研究の価値を毀損するものではなく、本報告は高いクオリティーの論文と判断し、榎村氏の努力を讃えたい。SEMや心理ネットワークモデルは集団の特性に依拠する傾向もあるので、今後引き続き同種の研究を多様な参加者に協力を求めて行っていき、より堅固な知見を得ていかれることを期待したい。

### A. 研究部門・報告Ⅱ

寺内 一

#### 結束性指標に基づく日本人英語学習者の エッセイライティングスコアの予測

【研究者：久保 佑輔】

本研究は、日本人英語学習者が作成したエッセイに関して、テキスト一貫性とエッセイの質の調査を実施した。本研究により、内容語および形容詞の重複使用という指導しやすい事項が、エッセイの質に影響を与えるということが明確になったことは評価できる。これらは決して難しい技能ではなく、ともすれば心がけ一つで改善できることであるため、エッセイを書き始めたばかりの初級の学習者から指導可能である。学習の初期からエッセイの質を高めるための習慣をつけることができれば、自信を持ってエッセイを執筆できる自律した学習者の育成にもつながるだろう。

一方、筆者が最後に本研究の限界点と今後の課題でも言及しているように、本研究にはこれから発展させていくべき課題もある。特に、今回は結束性指標に焦点を絞っているが、語彙の洗練性や複雑性、文法の正確性などといった英語のライティングにおける主要な因子との関係については、本研究との相関も含めてさらなる検証を行っていただきたい。

さらに、考察の説得力を高めるために、下記の2つの方法を提案する。1つ目は、重回帰分析において強制投入法を実施したり、因果関係の推測のために共分散構造分析を実施したりすることである。本研究では用いられなかったこれらの統計手法を用いてデータを分析することにより、本研究で使用した手法の妥当性を高めることができるだろう。2つ目は、分析に使用したエッセイを、結果に基づいて文章を書き換えた上で分析し直すことである。その結果、スコアが変化するのであれば、筆者の考察は説得力が高まるはずである。

## A. 研究部門・報告Ⅲ

齊田 智里

英検の長文テキストの読解に  
接辞の知識はどれくらい必要か？

— Morpholex Affix Profiler を用いた検討 —

【研究者：駒野 樹】

学習指導要領外国語科の改訂により、学習すべき語彙数は大幅に増加している。駒野氏は、効率的な語彙学習において有用な知識として「接辞」に着目し、英検の長文読解テキストを「接辞」の観点から分析した。分析した英文テキストは、英検の3級から1級までの5つの級の長文で、しかも、2014年度から2023年度の10年間に実施された全150回分の長文を分析したというから、その徹底ぶりから研究者としての意志の強さと実行力の高さが感じられる。対象となった総語数は225,210語である。英検のテストを対象とした接辞の大規模調査研究として、本研究は第一級の価値がある。

駒野氏は、Morpholex Affix Profiler を用いて、各級の長文テキストから抽出された接辞のレベルを分析した。具体的には、テキスト中に含まれる派生語の割合、登場する接辞の種類や頻度、語彙カバー率への寄与度を詳細に分析している。その結果、興味深い知見が次々と明らかになった。受験級が上がるにつれて、見出し語の割合は減少しているのに対し、派生語と屈折語の割合は増加傾向にあること、特に準1級から1級に関しては、派生語の割合が特に大きくなり、形態論的な複雑性が増していること、派生接辞のレベルは受験級が上がるにつれてその割合は増加していることから、難易度の高い文章の読解の際には高いレベルの接辞の知識が重要であること、特定の派生接辞が幅広い受験級の英文に高頻度で登場していること、語彙カバー率95%及び98%到達に必要な派生接辞の種類を各級ごとに明らかにしていることなどである。こうした駒野氏の緻密な分析から明らかになった貴重な知見が、語彙指導や英文読解テスト開発などに活かされることを期待したい。

## B. 実践部門・報告Ⅰ

齊田 智里

ディベートスキルとジャッジスキルの  
向上を目指した高校生英語ディベート  
初心者への効果的なフィードバック

【研究者：坂口 寛子】

学習指導要領の改訂により、高等学校外国語科で「論理・表現」という新たな科目が設置され、教室での英語ディベート活動がこれまで以上に注目されるようになってきた。高等学校で長年、英語ディベートの指導経験を有する坂口氏は、結果のフィードバックの在り方に工夫の余地があることに気づき、本実践研究を行った。

生徒がディベーターのみならず審査員も経験する教室ディベートにおいては、生徒のディベート・スキルの向上とともに、ジャッジ・スキルの向上も必要となってくる。結果伝達の際、審査員からディベーターに口頭でフィードバックが与えられることが一般的であるが、坂口氏は加えて、フローシート、及び、グラフィックオーガナイザーによるフィードバックの方法に着目し、ディベート初心者的高校生に対して、英語ディベート活動を通して3通りの異なるフィードバックを与えた。どのフィードバックがより有効かを検証するために、生徒のディベート・スキルとジャッジ・スキルが事前と事後でどのように変化したか、教師によるジャッジ判定の思考過程を生徒にわかりやすく伝えることができたかを、質問紙調査及び自由記述から明らかにしようとした。

ディベートやジャッジのスキルをまとめて分析をしてもよかったかもしれないが、スキルの各項目の変化に着目をして詳細に分析を行ったところに、坂口氏の実践家としてのこだわりがみられる。本実践研究を通して、英語ディベートでの口頭による通常のフィードバック以外のフィードバック方法にも光をあて、生徒の思考力、判断力、表現力等を一層育成するために、授業での多様な英語ディベート活動の可能性が示唆されたことの意義は大きい。

### 明示的知識を外化して正確性の向上を 目指す指導の効果

— 長期的なランゲージング・エピソードの分析を中心に —

【研究者：高木 哲也】

第二言語習得におけるランゲージング (languaging) では、生徒が言語の規則や使用に関する自分の思考プロセスを言語化して外在化し、言語の構造や意味に対する理解を深める。本研究では、高校1年生61名を対象に30語程度のライティング指導を実施した。生徒の書いた英作文に対して、教師はエラー箇所には下線や記号を付し、具体的な訂正を提示せず、間接的なフィードバックを与えた。生徒は指摘されたエラーについて、「なぜそれがエラーなのか」「どのように直せばよいか」を10分間考察し、口頭または筆記のランゲージングを通じてエラー修正を行った。指導は5ヶ月間で8回実施され、文法テストとテーマ設定をした自由英作文により効果を検証した。

本研究における条件の下では、口頭ランゲージング群は文法テストに効果があった。一方、自由英作文では両群ともに効果は見られなかった。ランゲージングの字数では両群に差はなく、質的分析では、筆記ランゲージング群が気づきのレベルの高いランゲージングを行った。一般的に、ランゲージングの効果検証には、どのような言語技能の学習に導入するか、学習者の英語力、口頭か筆記か、ランゲージングを紙に書くか端末で入力するか、ランゲージングにかかる時間、ランゲージングの頻度と間隔、個別学習か協働学習か、どのような効果検証の方法を採用するか等、様々な要因が関係する。今回は、長期的に口頭と筆記のランゲージングを実践したことで、英語授業にランゲージングを導入するための数々の貴重な示唆を得ることができた点で意義深い。今後は高木氏に、ランゲージングの活用条件を変えて実践を重ね、基礎データを蓄積し、ランゲージングの効果的な活用について研究をさらに深めていただきたい。

### ディスカッション活動において高校生の 発話の量と質を高める取り組み

【研究者：久山 慎也】

現代の英語教育における新たな挑戦の一つは、生徒が即興で英語を使ってやり取りをする力をどのように身につけさせるかという課題である。準備が可能な発表活動であれば、考えを練り、原稿を作成し、覚えて練習することで、ある程度見栄えのする発表ができるかもしれない。しかし、即興でのやり取りではそれが難しく、これまでに培ってきた英語力と対話力が試されることになる。その意味でも、生徒の即興でのやり取りの力は、英語教師の日頃の授業力が本当に試される場面と言えるだろう。

久山氏の研究では、このような重要な技能について、高校2年生を対象に2ヶ月間のディスカッション活動指導を行い、その成果を検証している。ディスカッションに有用な定型表現の指導から始まり、具体的な理由を述べる方法、さらに会話を維持・継続するための方略指導を行った。指導前後に行ったディスカッション活動でのやり取りの変化を調査した結果、定型表現の活用によって生徒の英語使用割合が増え、理由づけの量も増加し、限られてはいるが、いくつかのディスカッション方略の出現頻度の増加も見られた。

本研究は実験研究ではないため、統制群のような比較対象は存在しないが、現場で教師が日頃教えている生徒に対して一定期間、系統的な指導を行い、客観的データを収集・分析した、いわば模範的な「アクション・リサーチ」と言えるだろう。この研究から得られる示唆は、実験研究では得難い生態学的妥当性 (ecological validity) を持つと考えられる。今後もタスクや条件を変更し、今回の研究で伸びなかった方略の指導方法を検討するなど、実践に沿った研究の継続を期待している。

## B. 実践部門・報告Ⅳ

小泉 利恵

用法基盤モデルに基づいた  
スピーキング指導が  
中学生の『即興力』育成に及ぼす  
効果の検証

【研究者：吉澤 孝幸】

スピーキング力を伸ばすためにどのような指導をすべきか。小中高のそれぞれの文脈で、様々な実践がなされている。教員は授業後に、効果があった、なかったなど感じるだろうが、本研究はその感覚をより客観的な形で検証した。

吉澤氏は「メモ式スピーキング」の効果調べるために、その指導を受けた実験群と、「リテリング」指導を受けた比較群を設けた。教育的な有効性が先行研究で示されている「リテリング」と、「メモ式スピーキング」を比較することは、二者の違いが見られなかったり、「メモ式スピーキング」が劣ることが示されたりする可能性を考えると、研究デザインに組み込むことは、ある意味勇気が要ったろう。しかし、比較群にも有効な指導を施しながら実験を行い、指導法の優位性を検証することは、教育現場の中で行う研究として望ましいと考える。

本研究の実験群では、スピーキングが直後に向上し、遅延テストでも向上した状態が維持されていた。実験では、事前テスト・直後に行う事後テストの比較がよく用いられるが、長期的な検証のためには、「遅延テスト」も行う方がよい。「事後テスト」と「遅延テスト」の間には検証対象の指導は入れなかったという記載もあり、本研究は丁寧な計画を立てたことがわかる。

また報告書では、実験群・比較群の指導実践の手順が詳細に記載されている。研究では、興味を持った読者が同じように指導できる記述が望ましいが、実際は、読んでも情報不足で再現できない論文も多い。吉澤氏の論文は教員や研究者に非常に参考になる、優れた作品である。

## C. 調査部門・報告Ⅰ

竹内 理

日本語母語英語学習者が使用する  
定型表現の分析

—「話すこと[やりとり]」と「話すこと[発表]」  
の技能育成をめざして—

【研究者：小出 凱渡】

本調査は、英語の話し言葉の2つのモード(モノローグとダイアログ)において、日本人学習者の語連鎖(Lexical Bundles)の使用が、英語母語話者のそれとどう違うのかを、コーパス(ICNALE-Spoken MonologueとICNALE-Spoken Dialogue)を活用して解明しようとしたものである。調査の結果として、日本人英語話者が過剰使用する語連鎖と、過小使用する語連鎖が明らかになり、それぞれの特徴やモード毎の違いなどについても有益な報告がなされている。具体的には、モノローグでは、日本人学習者は特定の句動詞を含む語連鎖や、理由を述べる際に用いる表現を過剰に使用する傾向がみられた。一方で、英語母語話者と比較して、日本人学習者は多様な句動詞表現や助動詞を構成要素とする語連鎖をあまり使用していないことも明らかとなった。また、ダイアログでは、日本人学習者は、同一発話の繰り返しで構成される語連鎖や、いわゆるフィラーを含む表現を多用していたが、多様な時制表現を示す語連鎖やwould like toのような表現は利用できていないことが判明した。

以上のような成果から判断して、本研究はしっかりとした定義に基づき、ユニークな視点から英語学習者の語連鎖使用に切り込んだ力作と言える。今後、得られた結果を実践にどう活かしていくのか、その指導の観点や方法について、中学校での教育経験を積んでいる小出氏が如何に切り込んで行かれるのか、楽しみでしかたがない。

## 機械翻訳(MT)を学習ツールと するための考察

— 英作文を学ぶ大学生を対象とした量的・質的調査 —

【研究者：湯浅 麻里子】

本研究は、機械翻訳(Machine Translation)を使ってどのようにL2ライティングを行っているかの尺度を図るための学習ツールとするために、実際に英作文を学んでいる大学生を対象とした量的調査と質的調査の両方を実施している。量的調査のリサーチクエスチョンの「MTエンゲージメント尺度はどのような因子で構成されるか」と「MTエンゲージメント尺度の信頼性と妥当性はどの程度か」に対しては、行動・プリエディット認知・ポストエディット認知・情意・社会の5つの因子で構成され、さらに、MTエンゲージメント尺度の信頼性と妥当性は満たされているとの結果が得られている。

質的調査におけるリサーチクエスチョンは、「大学生英語学習者はMTエンゲージメントの5因子の強さによってどのようなグループに分かれるか」「これらのグループのMT自己効力感はどのように異なるか」「各グループの学生はどのようにMTを使っているか」である。低エンゲージメント、中エンゲージメント、高エンゲージメントの3つのグループに分類され、その検証結果が先行研究で言及されていることとほぼ一致していることが認められたという。

しかしながら、MT使用そのものに対する教師の理解度はまだ低いと言わざるを得ない。倫理面への配慮や自己効力感などの心理面も含めて、教育現場とビジネスの現場でのMTの使用実態を比較し、それを教育に活かしていくことが重要である。AIを含めたICTはビジネスにおいて欠くことのできない存在となってきつつあり、近い将来、それが前提となった英語学習に移行していくことは間違いないはずである。

本研究が今後の課題とした限界点は、研究者はもちろん認識する必要があるが、英語教育のみならず社会全体で取り組んでいくべき重要な視点であることも認識しておきたい。